

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03647

研究課題名（和文）経済学におけるパターナリズムの展開

研究課題名（英文）Transformation of Paternalism in Political Economy

研究代表者

中井 大介（Nakai, Daisuke）

近畿大学・経済学部・教授

研究者番号：70454634

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：「パターナリズム（paternalism）」や「功利主義（utility）」の蓄える意味合いが、どのように歴史的に変遷したのか、あるいはそのような変遷がどのように経済思想の歴史的展開と関連しているのかという問題について、18世紀後半から20世紀前半にかけて活躍した主要な英国経済学者らによる一次文献ならびにデジタルアーカイブズにおける実際の用例に注目しながら調査・分析を実施した。その結果、とりわけ19世紀末から20世紀初頭にかけて、パターナリズムがネガティブな意味合いを帯びる一方、経済学者らは功利主義のアイデアを積極的に理論的展開に援用することになった点等を論文や研究報告等を通して公刊・発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は「パターナリズム」や「功利主義」といった言葉の用例を歴史的に調査し、それらの概念の備える意味合いの変容に光をあてるものである。このような概念史的アプローチを通じて、特定の用語の意味合いの変化を浮き彫りにするだけでなく、我々の歴史相対的な価値判断の機敏であるけれども重要な変化を見極める手掛かりを得ることが可能となる。特に本研究で、19世紀末から20世紀初頭にパターナリズムが否定的な意味合いを帯びるようになった点、さらに功利主義への批判の論点が20世紀以降には快樂主義から分配問題へとシフトした点を明らかにした点は、現代の我々の経済的認識の立ち位置を再確認するうえで有益な手掛かりとなりうる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to investigate the historical evolution of the meanings of "paternalism" or "utilitarianism" and their relationship with the development of economic thought. The study focused on primary sources from major British economists who contributed to the development of economics from the late 18th century to the early 20th century, as well as actual examples of the usages of the words in digital archives. As a result, it was found that particularly from the late 19th century to the early 20th century, while paternalism took on a negative connotation, economists positively used the idea of utility in theoretical development, which was published and presented in papers and research presentations.

研究分野：経済思想

キーワード：功利主義 ヒューム ベンサム ピグー パターナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

新たな経済学のアプローチとして、実験などの手法を用いながら、非合理的にさえ見える個人の経済行動の解明を進める行動経済学ないし経済心理学が注目を集めている。このような近年の動向のなかで賛否両論を巻き起こしているのが、SunsteinとThalerの提唱した「リバタリアン・パターナリズム」である。リバタリアン・パターナリズムは、一見すると矛盾したフレーズである。ハイエク、フリードマン、ノージックなどを筆頭とするリバタリアニズムは、個人の選択の自由を最大限確保すべきであるとして、少なくとも他者に危害を加えない限り、麻薬の使用や売春などを政府が規制したり禁止したりすることにさえ、強く異議を唱えることのある立場である。これに対してパターナリズムとは、個人の行為が長期的にその本人に不利益をもたらすと見なされる場合、パターナリスティックな観点から政府が干渉・規制すべきであるとする立場であり、まさしくリバタリアンが駆逐しようとしてきたものだからである。

しかしながら、例えばタバコのパッケージに病巣の写真を掲載し、喫煙が健康に与える危害を強く知らしめることによって、購入を躊躇させたり自粛させたりするといった方法を用いれば、必ずしも各個人の選択の自由の幅を狭めることなく、よりよい選択肢へと彼らを誘導することができる、というのがリバタリアン・パターナリズムの主張である。このようなアイデアは、賛否両論を巻き起こすことになったが、主な反論としては、そのような方針はいずれにせよ個人の自由や選択肢を制限することに繋がるといった批判や、そのような方針を打ち立てる計画立案者の能力に関する問題点などが挙げられる。

このような論争はある意味において、選択の自由を軸に据えながら、個人の経済的自由とそれに対する政府の干渉の問題を見極めるには、経済理論的観点だけでなく、多様な観点からアプローチする必要があることを物語っているように見受けられる。すなわち政府の在り方に関する政治哲学的観点や、社会における個人の自由の意義に関する倫理的・哲学的観点からもアプローチする必要があると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、経済学が広い意味での哲学の一部門に据えられ、倫理や哲学の問題と密接に関係する学問分野と見なされていた18世紀や19世紀の経済学において、自由と干渉の問題がどのように論じられていたのか、さらにその認識がどのように変容したのかを明らかにすることである。換言すれば、「自由」と「干渉」の緊張関係を軸に経済学の歴史を再構成することによって、経済的自由の広範な意義を鮮明に描き出すことを目指すものである。

以上のようなパターナリズムと自由主義の相克に関する議論を睨みながら、本研究では、アダム・スミス以降の主流経済学の歴史において、「パターナリズム」や経済学の背後にある価値観と言われる「功利主義」といったアイデアが一体どのように展開されてきたのかに着目する。自由と政府介入に関する問題は、ある意味で経済学史・経済思想研究において、これまで多種多様に究明されてきた主要テーマともいえる。17世紀後半におけるスミスの重商主義批判、19世紀前半におけるリカードとマルサスの間で交わされた穀物法論争、19世紀半ばから後半におけるミルやマーシャルの社会主義への接近、そして20世紀におけるケインズ革命やリバタリアニズムからの反発などである。本研究では、これらの論点に関する先行研究の成果を継承しつつも、「パターナリズム」や「功利主義」というアイデアの発展と変容に焦点をあてながら、経済学の歴史を再点検するものである。

## 3. 研究の方法

本研究では、「パターナリズム」ないし「功利主義」の概念の歴史の変遷に注目する。そこで、「paternal」、「paternalism」、「utilitarianism」、「the general happiness」といった言葉やアイデアが、経済学者たちによってどのような文脈で使用されているのかに特に注目した。このように概念史の観点からアプローチすることで、経済学の歴史やその現代的意義を再検討することにも繋がると考えられるからである。

さらに、近年電子化が進められている各種文献・新聞・雑誌やイギリス議会文書などのデータベースを活用しながら、「paternal」や「paternalism」の活用法とその伝播について、経済学の文献だけに留まらず、広く歴史的な考証を試みた。これは、各経済学者たちの用語法の一般性や特殊性を、歴史的な文脈に照らして正確に理解するために不可欠なアプローチであるのみならず、「パターナリズム」自体の概念史を再検証するうえで欠かせないと考えられるからである。

具体的には、主要な経済学者の一次文献・二次文献・手稿類の精査を進めると同時に、広くイギリス社会一般での「paternal/paternalism」や「utilitarianism」の用法について、社会科学関連文献のデータベースであるThe Making of Modern World、The Economist Historical Archive 1843-2020、The British Newspaper Archiveなどを活用しながら、概念史的手法を用いつつ歴史的検証を進めた。

## 4. 研究成果

2017年度は、本研究のテーマであるパターナリズムに関する概念史の出発点として、18世紀から19世紀における経済学関連の主要な一次資料を広く参照し、paternalism(干渉主義)や paternal government (干渉的政府)などの単語やフレーズの歴史的用法の調査を進展させた。さらにパターナリズムの性質を見極めるうえで重要なキーワードとして浮かび上がった、dignity ないし human dignity(尊厳ないし人間の尊厳)についても、同様に広く一次文献等を用いた調査を進展させた。以上に関連する研究成果として、国際学会 History of Economics Society (北米経済学史学会)の年次大会 (Annual Conference 2017、カナダ、トロント大学) に出席し、「Economics, Utilitarianism and Human Dignity: A Historical Perspective」(経済学、功利主義および人間の尊厳：歴史的視野から)というタイトルで研究報告を実施した。

2018年度に関しては、ベンサムとヘンリー・シジウィックの経済思想の関係に関する研究を進展させた。同年5月には、国際ワークショップ「New Bentham? Classical Utilitarianism After the Bentham Project's Critical Editions of Bentham's writings」(ローマ)に参加し、「Utilitarian Economic Tradition: Bentham and Sidgwick」として研究発表を行った。さらに同ワークショップでの議論を踏まえて同研究の修正・改善を行い、2018年9月には国際学会「History of Economic Thought Society of Australia」(パース)で研究発表を行った。また、経済と福利の関係に関する研究を進展させ、論文「経済、格差および福利の指標化」を完成させた。同論文は、深貝編『幸福、ウェルビーイングと社会倫理』ナカニシヤ出版として刊行予定である。この他に英文書評論文「Élie Halévy, Japanese translation by Yoshio Nagai: La Formation du Radicalisme Philosophique. Hosei University Press, 2016, Vol. 1, xvii + 443 pp.; Vol. 2, vii + 374 pp.; Vol. 3, viii + 577 pp.」(*The History of Economic Thought* 60(2) 113-114 2019年1月)を刊行した。

2019年度においては、本研究の軸となる経済学者・哲学者であり、ジェレミー・ベンサム、ジョン・スチュアート・ミル、およびヘンリー・シジウィックの経済思想および自由主義・パターナリズムとの関係性について、一次文献およびデータベースを用いた資料調査ならびにデータ分析をさらに進展させた。特に報告者の本務校である近畿大学において、2020年はじめには経済学・社会科学に関するデータベースが新たに導入され(*The Making of the Modern World Part 3*)、同データベースを用いた19世紀における「パターナリズム」の発現に関するテキストマイニング分析を始動させることが出来た。同データベースのPart IとPart II(本務校に導入済み)とあわせて、19世紀の多様な社会科学文献から、計量的手法を用いて「パターナリズム」や「パターナル・ガバメント」の抽出を行った。

2020年度には、電子データベース等を活用しながら、パターナリズムの用例に関する調査を進展させた。そしてヘンリー・シジウィックを軸にしなが、パターナリズムとリベラリズムに関連を明らかにする研究の成果として、2020年7月に英文論文「Liberal Aspects of Sidgwick's Economic Ideas」(*Ikoma Journal of Economics* 18(1) 1-22 2020年7月)を刊行した。またアメリカ・シカゴ大学での International Society for Utilitarian Studies (国際功利主義学会)の年次大会での報告がアクセプトされていたものの、コロナウィルスによる影響のため、同年次大会が中止となった。イギリス・大英図書館やケンブリッジ大学図書館でのパターナリズムの起源に関する現地資料調査も予定していたものの、コロナウィルスの影響により渡航を見送ることになった。パターナリズムの用例に関する研究報告として、2021年2月に第70回経済思想研究会(第5回ケインズ学会東北部会・第2回良き社会研究会共催)にて「19世紀後半から20世紀初頭におけるパターナリズムの展開」として研究報告を行った。同研究内容について、英文論文として現在刊行の準備を進めている。

2021年度には、2020年の国際功利主義学会での報告がアクセプトされていたものの、新型コロナウイルスの流行により2021年に延期された報告を予定していた。しかしながら、2021年度も実施困難のために最終的に開催中止となり、報告を実施する事ができなかった。またイギリス大英図書館およびケンブリッジ大学での概念史研究に関する資料調査を予定していたものの、これらも渡英が困難となり実施する事ができなかった。他方で功利主義に関する歴史的調査を進展させ、その成果を論文「功利主義へのリアクション(1) その起源と反発」(*生駒経済論叢* 19(1) 1-15 2021年7月)として刊行した。また書評論文「Samuel Hollander A History of Utilitarian Ethics: Studies in Private Motivation and Distributive Justice, 1700-1875 Abingdon and New York: Routledge, 2019, xxiii + 424 pp.」(*The History of Economic Thought*, 63(2) 63-64 2022年1月)を刊行した。また研究報告として、慶應義塾大学にて「ベンサムの経済思想：J.S.ミルとの比較から」(第4回ミル合同研究会 2021年11月14日)を実施した。

以上のように国際学会の中止や渡航の困難から、2022年度に繰り越す形で研究を継続させ、2022年10月末にケンブリッジ大学でデジタルアーカイブを用いた「paternalism」や「utilitarianism」の用例に関する調査を実施した。ヒューム、ベンサム、ピグーの功利主義観の研究を進展させ、その成果を2022年6月に「経済学が功利主義に基礎を置くのはいかなる意味においてか ヒューム、ベンサム、ピグー」として経済学方法論フォーラム第46回研究会で発表した。さらに同研究報告の内容をブラッシュアップし、共著書『経済学史入門：経済学方法論からのアプローチ』久保真・中澤信彦編 昭和堂(2023年4月)として刊行した。また、書評論文「Alex Millmow The Gypsy Economist: The Life and Times of Colin Clark Singapore: Palgrave Macmillan, 2021, xx + 396 pp.」(*The History of Economic Thought* 65(1))を執

筆した(2023年7月刊行予定)。「功利主義」への反発やその概念の蓄える意味合いの変容についての研究成果として、論文「功利主義へのリアクション(2) 経済理論との交錯」(『生駒経済論叢』21(1) 2023年7月刊行予定)を執筆した。

以上のように本研究では、「パターナリズム(paternalism)」や「功利主義(utility)」の蓄える意味合いが、どのように歴史的に変遷したのか、あるいはそのような変遷がどのように経済思想の歴史的展開と関連しうるのかという問題について、18世紀後半から20世紀前半にかけて活躍した主要な英国経済学者らによる一次文献ならびに各種歴史デジタルアーカイブズにおける実際の用例に注目しながら調査・分析を実施した。その結果、とりわけ19世紀末から20世紀初頭にかけて、パターナリズムがネガティブな意味合いを帯びる一方で、経済学者らは功利主義のアイデアを積極的に理論的展開に援用することになった点等を論文や研究報告等を通じて公刊・発表した。また今後の本研究の成果を英文論文「John Stuart Mill, Sidgwick and the Philosophical Foundations of Political Economy」(*James and John Stuart Mill's Contributions to Economic Thought and Theory*, edited by John Vint, Routledge 2024年刊行予定)をはじめとして随時発表していく計画である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Daisuke Nakai (書評論文)	4. 巻 63(2)
2. 論文標題 Samuel Hollander A History of Utilitarian Ethics: Studies in Private Motivation and Distributive Justice, 1700-1875 Abingdon and New York: Routledge, 2019, xxiii + 424 pp.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The History of Economic Thought	6. 最初と最後の頁 63-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中井 大介	4. 巻 19(1)
2. 論文標題 功利主義へのリアクション(1) その起源と反発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生駒経済論叢	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Daisuke Nakai	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 Liberal Aspects of Sidgwick's Economic Ideas	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ikoma Journal of Economics	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Daisuke Nakai (書評論文)	4. 巻 60(2)
2. 論文標題 Elie Halevy, Japanese translation by Yoshio Nagai: La Formation du Radicalisme Philosophique. Hosei University Press, 2016, Vol. 1, xvii+443 pp.; Vol. 2, vii+374 pp.; Vol. 3, viii+577 pp.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The History of Economic Thought	6. 最初と最後の頁 113-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中井 大介	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 功利主義へのリアクション(2) 経済理論との交錯	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 生駒経済論叢	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Daisuke Nakai (書評論文)	4. 巻 65(1)
2. 論文標題 Alex Millmow The Gypsy Economist: The Life and Times of Colin Clark Singapore: Palgrave Macmillan, 2021, xx + 396 pp.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The History of Economic Thought	6. 最初と最後の頁 61-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 中井大介
2. 発表標題 経済学が功利主義に基礎を置くのはいかなる意味においてか ヒューム、ベンサム、ミル、ピグー
3. 学会等名 経済学方法論フォーラム第46回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中井大介
2. 発表標題 ベンサムの経済思想: J.S.ミルとの比較から
3. 学会等名 第4回ミル合同研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中井 大介
2. 発表標題 19世紀後半から20世紀初頭におけるパターナリズムの展開
3. 学会等名 第70回経済思想研究会（第5回ケインズ学会東北部会・第2回良き社会研究会共催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Daisuke Nakai
2. 発表標題 Utilitarian Economic Tradition: Bentham and Sidgwick
3. 学会等名 History of Economic Thought of Australia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Daisuke Nakai
2. 発表標題 Economics, Utilitarianism and Human Dignity:A Historical Perspective
3. 学会等名 History of Economics Society Annual Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中井大介（共著「経済学が功利主義に基礎を置くのはいかなる意味においてか ム、ピグ」）	ヒューム、ベンサム、ピグ	4. 発行年 2023年
2. 出版社 昭和堂		5. 総ページ数 288
3. 書名 『経済学史入門: 経済学方法論からのアプローチ』久保・中澤編		

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------